

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006 ～ 2009
課題番号：18520462
研究課題名（和文） 英文法及び英単語に関する明示的知識が英語運用能力向上に与える効果について
研究課題名（英文） The effects of explicit grammatical and vocabulary knowledge on improvement of English proficiency
研究代表者
赤松 信彦（AKAMATSU NOBUHIKO）
同志社大学文学部・教授
研究者番号：30281736

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：英文法、英語語彙、学習法、認知言語学、自動化

1. 研究計画の概要

本研究の目的は、どのような「働きかけ」をすれば、認知言語学や認知心理学研究から得られた「英文法や英単語に関する明示的知識」を英語運用能力向上に貢献させることができるのか、を探求することである。具体的には、日本人英語学習者にとって習得困難とされている前置詞や冠詞の学習を重点研究対象とし、従来の学習法（例、辞書や文法書の説明・例文を活用した学習法）と比較し、認知言語学的知見に基づく新しい学習法（例、core image を活用した学習法）の効果を検証する。

2. 研究の進捗状況

(1) 冠詞に関するテスト（選択肢・空所補充形式・全 40 問）を 250 名の大学生に対して実施し、各問題に対する解答理由の記述と、その正答性に対する自信度を 5 段階評価で記させた。その結果、日本人大学生の英語冠詞に関する知識は、冠詞の種類によって著しく異なることが明らかになった。もっとも適切に使用されていた冠詞は定冠詞であった。対照的に、無冠詞の適切な使用は困難であった。

英語力が高い学習者ほど適切に英語冠詞を使用し、客観的判断力を有していることが示された。さらに、定冠詞使用のキーワードとなる単語が顕著である場合や、冠詞を含む語句を一つのチャンクとして記憶している場合、適切に冠詞を使用していることが明らかになった。対照的に、一般的総称を示す単数名詞に対する不定冠詞や不可算名詞に対する無冠詞は、適切な使用が困難であった。

(2) 63 名の日本人大学生を対象に前置詞（at, in, on）に関して 60 項目からなる空所補充問題を実施した。この事前テストと Institutional TOEFL の結果に基づき、被験者を等質の 2 つのグループに分け、一方は認知言語学的知見（core image）に基づく学習法で、他方は英和辞書に記載されている定義と例文を活用した従来型学習法で、前置詞を復習させた（学習時間約 30 分）。学習終了後直ちに前置詞に関するテスト（事後テスト）を実施した。

事前テストと事後テストの得点を分析した結果、認知言語学的知見に基づく学習法と従来型の学習法とでは、その学習効果という点において統計的に有意な差はなかった。core image という認知言語学的知見に基づく明示的学習は前置詞に関する既習知識を再構築するには至らなかった。この理由としては、(1) 前置詞に関するテストで用いた項目が core image から連想できる範囲を超えているものが多かった可能性や(2) 学習者は英語の前置詞を学ぶ段階で日本語の助詞の影響を受け、この母語の影響を排除するような根本的な知識の再構築は、認知言語学的知見に基づく明示的学習では行われなかった可能性などが考えられる。

3. 現在までの達成度：やや遅れている

2008 年度は、学習時の認知活動について、学習者自身が記述する方法（Languaging）を用いて、認知言語学的知見に基づく学習法が「英語冠詞」の学習に与える効果を調査・考察する予定であったが、「色、形、物質の素材に対する認知スタイルが日本人英語学習

者の英語冠詞使用時の正確さに影響を与える」という研究結果（例、アサナソボロス博士、クック博士）を反映し、同様の手法を用いて、学習者の認知スタイルをデータ収集・分析することに変更したため、当初の予定より約4ヶ月研究が遅れている。

4. 今後の研究の推進方策

上記の理由より2009年度前半に予定していた「前置詞の学習」に対する研究を2008年度後半に前倒し研究した。そして、2009年度前半は、「冠詞の学習」に対する研究の最終段階と位置づけ、学習者の認知スタイルを測定するため、物質の素材や色に対して認識する際の認知活動を測定する実験を導入し、従来型の辞書を用いた学習法との比較の上、認知言語学的知見に基づく学習法の効果を調査・考察する。さらに、2009年度後半は、3カ年半に渡る研究の総合的分析とその分析結果に基づく報告書及び論文執筆を行う。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

(1) Akamatsu, N., & Tanaka, T. (2008). The use of English articles: An analysis of the knowledge used by Japanese university students. *ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)*, 19, 81-90. (査読有り)

(2) Akamatsu, N. (2008). The effects of word-recognition training on automatization in English as a foreign language. *Applied Psycholinguistics*, 29, 175-193. (査読有り)

〔学会発表〕（計5件）

(1) Akamatsu, N. (2009). Restructuring foreign language lexical knowledge: Do cognitive linguistic insights contribute to foreign language learning? The Annual Convention of the American Association for Applied Linguistics (AAAL) (Denver, U. S. A.). (査読有り) 【2009年3月22日発表】

(2) 赤松信彦・田中貴子 (2007). 「日本人大学生の英語冠詞に関する知識」 第33回全国英語教育学会 (大分) (査読有り) 【2007年8月5日発表】

〔その他〕

(1) 赤松信彦 (2006). 「外国語の学習：ハートで英語は身に付くか？」 同志社女子大学 英語英文学夏期公開講座 (京都)